
ハルジオン

るーらりら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハルジオン

【Nコード】
N1502I

【作者名】
るーらりら

【あらすじ】
ふたつの孤児^{みなしこ}を巡り合わせる事。
その役目を果たすと己は壊れて消える。

彼女のためなら、この役目を果たして消え去ろう。

序

恐ろし、恐ろし、お前は恐ろしい。汝は恐ろしい。

この声は何時になっても消えず、己の全てが壊れるまで聞こえてくる。

ふたつの孤児がいた。

一方の孤児は、くねくねと曲がりくねる一本道を何もわからず進む。そして行く先たびに道の中央に落ちている黒い羽を拾い集めていく。もう一方の孤児は、

闇へと堕ちていた。

闇の使者ともいえる漆黒の翼を広げ、暗闇の奥深くにて地上へ上がれる時を今か今かと待ち望んでいる。

このふたつが巡り合う時。

汝は消える。

第零記 「

」

「血の味は知っている」

そう言つて戦に出かける。

いつも同じ。

屍がいたるところに転がる血の荒地。

そこで生き残っている奴がいた。意外だった。

傷だらけで、服が破け（それはもう裸に近かったか）所々血が滲む、美貌を失くした少女。

「あなたは、かみさ、ま？ か、み、さまな、の？」

少女は力を失くした声で俺に問う。

少女に『神様』と呼ばれた俺には、傷一つついていなかった。

「かみさ、ま、私を、助け、て、」

冷たい風が吹いた。少女にはその風は毒矢のようだった。傷にしてみたようだ。少女は痛そうに顔をしかめた。

「痛い、よ」

俺は少女に何も言つてやれない。

「かみさま、この傷を、癒し、て、」

「できない」

少女は俺の言葉に瞳に涙を滲ませた。

「どうして、？」

「どうしても」

も て し う ど

「エエエエッ!？」

少女は勢いよく俺にしがみついて、俺の腕を噛み切ろうとした。けど俺は噛み切られる前に少女を突き放す。

[illegible]

少女は硬い地面に仰向けになり、顔を涙と血でぐちゃぐちゃにしていた。

⌈
⋮
⌋

「いやいやいやあああああつ！」

「泣くな」

「いや、」

——君が消えれば、我は幸福へと飛び立つことができる。
君が消えれば、我は痛みを失くし、癒しを永遠に受けること——

俺の歌った唄。少女はこの唄を知らないようだった。

「かみさ、ま、それ、な、に、」

「黒い孤児が歌った唄。この唄の通り『君』、大切なものを消せば
お前は幸福を得ることができる」

「こうふく？ 幸せ？」

俺はそれに頷くだけ。

「無理、む、り。私に、私にね？ 大切なものなんてない」
残念。

「哀れな娘」

これはもう無理だ。

俺はそう思つてこの血生臭い荒地から去ろうとした。

が、少女に「待つて」と呼び止められる。

「私に、大切なものいた、よ」

「じゃあそいつを早く消——」

「私の大切なものはかみさまなの」

気づいたときは少女に人差し指で指さされていた。

——何？

「今の死にそうな私にとつて、かみさま、大切。だって、ね。傷
を、癒してく、れるもの」

「だから」

「かみさま」

「消すの」

気づいた時には少女は俺に飛びかかってくる。
目の前が真っ赤に染まったような気がした。

第一記 雑草と花

「——っ！」

右腕に激痛が走る。

今は地面に倒れこんでいるこの少女に、噛み切られそうになった右腕。

少女に飛びかかってこられた時、この右腕を噛まれた。噛み切られなくて済んだが——。

「……」

俺は足もとに倒れこんでいる少女を見下ろす。

少女はもう動くことはない。けどこれで良かったと思う。

もう痛みを感じることはない。これは『癒し』。

「これがお前の求めていた癒し。良かったな、癒しを受けることができたんだぞ」

もちろん少女が応えることはない。

「さあ、俺はもう帰るよ。この地に孤児がいなかったことが分ったし、もう用はないからな」

この荒地に孤児はいなかった。血を好む『黒い孤児』。

何処に居るんだろう。早く探して『白い孤児』と巡り合わせなければ。

そのために俺はこの地に立つ。そして『彼女』のためにも。

『彼女』のためにも。

「孤児はいたの」

目の前の、綺麗な赤い薔薇が絡まる玉座に座る主。この世で最も美しいであろう美貌をもち、黒を基調とした美しいドレスを身にまとい、黒い腰まで伸びる髪、そして闇色だが、奥に光を秘めている瞳。彼女——レフィリアは使者の黒に近い灰色のジャケットを着、緑エメラルド色の瞳の少年に問う。

「いや、あの荒地にはいませんでしたよ。——ただ、」

「………何かしら」

「雑草の類の娘はいました」

少年の言葉にレフィリアは微笑む。

「そう、雑草が。」

それで、その右腕は、雑草にやられたのね」

第一記 雑草と花（後書き）

あとでまた続きを書きます、
中途半端ですみません（<|>）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1502i/>

ハルジオン

2010年11月25日18時32分発行